

B 業 態 別 成 績

1) 業態別1人1日当り栄養摂取量

業態別に栄養摂取量を比較してみると消費者世帯はこの数年停滞気味の傾向にあったが、本年度はすべての栄養素は一率に大きな伸びを示し、摂取栄養量は大巾に増加し生産者世帯に比べて、その栄養状態は相当高い水準を示している。

一方、生産者世帯においても各栄養素に若干の増加をみせているが、それらの栄養素を消費者世帯と比較してみると熱量は159カロリーも多いけれどもその他の動物性蛋白質は22.5グラムで(－)7.3グラム、脂肪は24.5グラムで(－)6グラム、その他カルシウム、ビタミンA、B₂等も相当低い数値を示し生産者世帯の栄養状態の改善には今後相当な努力が必要であることがわかる。

第32表

業 態 別 栄 養 摂 取 量 の 比 較

			摂 取 量			対 前 年 比		
			生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯
熱	量	Cal	2,186	2,026	2,093	(－)1.1	(－)0.5	(+)1.1
蛋白質	総量	g	69.0	71.2	70.2	(+)0.6	(+)1.0	(+)0.4
	動物性	g	22.5	29.8	25.9	(+)9.2	(+)4.2	(+)2.7
脂	肪	g	24.5	30.5	23.8	(+)7.9	(+)6.6	(－)2.5
カルシウム		mg	387	410	405	(+)1.3	(+)2.2	(+)1.2
	A	I. U.	1,204	1,409	1,081	(+)12.4	(+)5.9	(－)1.7
ビタミン	B ₁	mg	1.03	1.15	103	0	(+)9.5	(－)1.0
	B ₂	mg	0.72	0.80	0.73	(+)4.3	(+)3.9	(－)4.1
	C	mg	76	75	68	(－)1.3	0	(+)8.8

なお、消費者世帯の細分の中で最もバランスのとれた栄養素の摂取状態を示しているのは常用勤労者世帯であり、次いで事業経営者世帯となっている。

日雇・家内労働者世帯は年々改善されてきたものの、栄養摂取量はこれらのなかで最も低い水準にある。

(イ) 生産者世帯

熱量は2,186カロリーで全業態中最も高く全国平均を106カロリー上回っている。

蛋白質は69.0グラム(うち動物性蛋白質22.5グラム)で前年に比べ(+)0.6%、動物性蛋白質は(+)9.2%、脂肪は24.5グラムで(+)7.9%、カルシウムは387ミリグラムで(+)1.3%、ビタミンAは1,204国際単位で(+)12.4%、ビタミンB₂は0.72ミリグラムで(+)4.3%と増加しているけれども他の世帯に比較すると全般的に低く、今後なお栄養構成の面で相当の改善をはかる必要があるといえよう。

なお、ビタミンB₁は1.03ミリグラムで前年の摂取量と変わらず、ビタミンCは76ミリグラムで僅かに減少している。

(ロ) 消費者世帯

熱量は2,026カロリーで前年に比べ若干減少がみられる。

蛋白質の摂取量は71.2グラムで前年に比べて大差はないが、動物性蛋白質は29.8グラムで前年に比べ(+)4.2%の増加を示している。

脂肪の摂取量は30.5グラムで前年に比べ(+)6.6%, カルシウムは410ミリグラムで(+)2.2%, ビタミンAは1,409国際単位で(+)5.9%, ビタミンB₁は1.15ミリグラムで(+)9.5%, ビタミンB₂は0.80ミリグラムで(+)3.9%といずれも大きい伸びをみせて他業態を上回っている。

次に5月調査において消費者世帯を細分調査した結果について検討してみると次のとおりである。

第33表

消費者世帯細分栄養摂取量

(37年5月)

		摂 取 量				対 前 年 比			
		事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
熱 量	Cal	2,068	2,026	2,005	2,003	-0.7	-0.2	-1.6	-0.8
蛋白質	総 量	73.4	71.7	67.6	71.9	+1.2	+1.8	-1.2	+2.6
	動物性	30.6	30.8	25.4	29.5	+4.6	+6.5	+4.3	+7.5
脂 肪	g	29.4	32.3	24.1	26.8	+6.1	+8.0	+5.4	+2.2
カルシウム	mg	414	426	382	420	+1.9	+4.5	+1.0	+1.7
ビ	A	I. U.	1,230	1,446	1,119	+7.4	-126	+9.1	+134
タ	B ₁	mg	1.09	1.10	0.96	+1.8	0	-2.1	+8.7
ミ	B ₂	mg	0.83	0.84	0.74	-2.4	-3.6	+2.7	+8.5
ン	C	mg	74	75	61	+1.4	-4.0	-3.3	0

事業経営者世帯

熱量は2,068カロリーで消費者世帯中最も高い。蛋白質は73.4グラム、動物性蛋白質30.6グラム、脂肪29.4グラム、カルシウム414ミリグラム、ビタミンA1,230国際単位、ビタミンB₁1.09ミリグラム、ビタミンB₂0.83ミリグラム、ビタミンC74ミリグラムで、ビタミンB₂が前年に比べて若干減少した以外はすべて増加している。

常用勤労者世帯

熱量の摂取量は2,026カロリーで前年と大差はないが、動物性蛋白質は30.8グラム、脂肪32.3グラム、カルシウム426ミリグラム、ビタミンAは1,446国際単位、ビタミンB₁1.10ミリグラム、ビタミンB₂0.84ミリグラム、ビタミンC75ミリグラムとこの世帯の栄養構成は全業態中最もすぐれている。

日雇・家内労働者世帯

この世帯における熱量の摂取量は2,005カロリーで前年に比べ若干減少がみられる。

蛋白質は67.6グラム(うち動物性蛋白質は25.4グラム)、脂肪24.1グラム、カルシウムは382ミリグラム、ビタミンA1,119国際単位、ビタミンB₁0.96ミリグラム、ビタミンB₂0.74ミリグラム、ビタミンC61ミリグラムで前年に比べて動物性蛋白質、脂肪、カルシウム、ビタミンA、ビタミンB₂等は前年摂取量を上回っているが、すべての栄養素について摂取量は全業態中最も低い。

その他の消費者世帯

熱量の摂取量は2,003カロリーで前年摂取量を下廻り、全業態中最も低い。

蛋白質は71.9グラム(うち動物性蛋白質29.5グラム)脂肪26.8グラム、カルシウム420ミリグラム、ビタミンA1,310国際単位、ビタミンB₁1.03ミリグラム、ビタミンB₂0.82ミリグラム、ビタミンC74ミリグラムで動物性蛋白質、脂肪、カルシウム、ビタミンA、ビタミンB₁、ビタミンB₂等はすべて前年の摂取量を上廻る伸びを示したが、その栄養水準は日雇、家内労働者世帯に次いで低い状態ある。

(ハ) その他の世帯

熱量は2,093カロリー、蛋白質70.2グラム（うち動物性蛋白質25.9グラム）、脂肪23.8グラム、カルシウム405ミリグラム、ビタミンA1,081国際単位、ビタミンB₁1.03ミリグラム、ビタミンB₂0.73ミリグラム、ビタミンC68ミリグラムと前年に比べて大きな変化はみられず一般に伸び悩みの傾向を示している。

2) 業態別1人1日当り食品群別摂取量

食品摂取量を業態別にみると、まず生産者世帯は例年に比し米を含む穀類、いも類等が減少して油脂類、動物性食品が徐々に増加するなど食品の種類、質的内容についても改善の傾向を見せはじめている。

消費者世帯は前年度に引き続き油脂類、動物性食品、豆類の食品が順調に増加しているが野菜、果実類は実質的な増加を示すに至っていない。

消費者世帯の中で食糧構成が最もすぐれているのは常用勤労者世帯で事業経営者世帯がこれに次いでいる。

しかし、消費者世帯の中でも低所得階層と考えられる日雇・家内労働者世帯は野菜・果実類・油脂類、動物性食品等の摂取量は極めて低くその食糧構成は他業態に比べ低い水準にある。

(イ) 生産者世帯

米の摂取量は393.2グラムで前年に比べ若干減少したが、小麦は52.4グラムで前年に比べ（＋）6.5%増加している。

第34表 常用勤労者世帯と日雇・家内労働者世帯
の食品摂取率の比較 (1人1日当り)

	常用勤 労者 世帯 (a)	日雇・家内 労働者世帯 (b)	(a)/(b)
米	318.8	361.7	113.5
大 麦	8.8	19.0	215.9
小 麦	77.7	52.0	66.9
甘 藷	3.4	4.3	126.5
馬 鈴 薯	26.7	28.0	104.9
砂 糖	14.3	11.9	83.2
油 脂	9.7	5.2	53.6
大 豆 製 品	66.8	72.9	109.1
魚 介 類	73.9	75.3	101.9
肉 類	35.7	21.2	59.4
卵 類	35.4	25.2	71.2
乳 類	58.9	25.8	43.8
緑 黄 野 菜	35.3	37.4	105.9
そ の 他 野 菜	119.1	113.2	95.0
柑 橘 類	18.4	8.4	45.7
その他の果実	30.5	17.0	179.4

いも類は62.9グラム、豆類67.5グラムと前年摂取量を下回っているが、油脂類は6.4グラムで前年に比べ（＋）14.3%、動物性食品も130.7グラムで（＋）13.1%増となっている。

野菜類では緑黄色野菜は46.4グラムで（－）0.9%、その他の野菜135.1グラムで（＋）7.5%、果実類は柑橘類・トマトが17.5グラムで（＋）27.7%、その他の果実は48.3グラムで（－）23.9%となっており、総量としては伸び悩みを示している。

(ロ) 消費者世帯

穀類の摂取量は417グラムで前年に比べ若干減少しそのうち米は330.2グラムで（－）3.0%減少したが、小麦が77.6グラムで（＋）4.9%増となっている。

いも類摂取量は49.0グラムで（＋）8.9%、油脂類8.3グラムで（＋）13.7%、豆類は72.5グラムで（＋）3.4%、動物性食品193.5グラムで（＋）7.1%と主要食品はいずれも大巾な増加を示している。

また、野菜・果実類の摂取状況をみると緑黄色野菜は34.7グラムで（－）0.6%、その他の野菜は113.8グラムで（＋）4.5%、柑橘類・トマト33.3グラムで（＋）10.3%、その他の果実54.7グラムで（－）10.9

％と余り大きな変化はみられない。

以上のように消費者世帯は食糧構成においても他の業態をはるかに上回る水準を示している。

次に5月調査について消費者世帯を細分した各業態の食品摂取量を検討してみよう。

第35表 食品群別摂取量 (消費者世帯細分37年5月)

食 品 群 別	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
米	347.7	318.8	361.7	331.4
大 麦	10.5	8.8	19.0	19.4
小 麦	71.9	77.7	52.0	67.7
甘 藷	3.8	3.4	4.3	4.1
馬 鈴 薯	23.7	26.7	28.0	23.4
砂 糖	13.5	14.3	11.9	14.0
油 脂	7.4	9.7	5.2	6.9
味 噌	24.6	23.1	27.8	25.9
大 豆 製 品	40.1	37.6	38.4	42.9
魚 介 類	78.4	73.9	75.3	78.5
肉 類	33.4	35.7	21.2	27.1
卵 類	29.7	35.4	25.2	33.0
乳 類	47.2	58.9	25.8	42.4
緑黄色野菜	35.2	35.3	37.4	37.7
その他の野菜	121.5	119.1	113.2	118.0
柑橘類・トマト	24.5	27.4	13.0	25.9
その他の果実	27.2	30.5	17.0	

事業経営者世帯

穀類の摂取量は430.3グラム、いも類39.5グラムで前年に比べて(－)2.5％、(－)7.5％と減少している。

油脂類は7.4グラム、豆類71.9グラム、動物性食品88.7グラムで前年に比べ(＋)7.2％、(＋)5.3％、(＋)4.8％と増加している。

野菜、果実類についでみると、緑黄色野菜は35.2グラム、柑橘類、トマトは24.5グラムで(＋)2.6％、(＋)15.0％と前年摂取量を上廻っているが、その他の野菜は121.5グラムで前年と変わらず、その他の果実は27.2グラムで(－)27.9％と大きく減少している。

常用勤労者世帯

全業態中穀類の摂取量は最も低く、本年摂取量は405.5グラムで前年に比べ(－)2.7％減少している。油脂類は9.7グラム、豆類66.8グラム、動物性食品203.9グラムでいずれも(＋)12.8％、(＋)4.2％、(＋)11.5％と前年摂取量を上廻っている。

また、緑黄色野菜は35.3グラム、柑橘類・トマト27.4グラムで(＋)5.7％、(＋)11.4％と増加しているが、その他の果実類は30.5グラム、その他の野菜は119.1グラムで(－)28.4％、(－)0.3％と減少を示している。

日雇・家内労働者世帯

穀類の摂取量は432.7グラムで消費者世帯中最も高いが、前年に比べて(－)4.0％減少している。油脂類は5.2グラム、豆類72.9グラム、動物性食品147.5グラムで前年に比べ(＋)13.0％、(＋)4.7％、(＋)19.6％と増加し、食糧構成は相当改善されてきている。

緑黄色野菜は37.4グラム・柑橘類、トマト13.0グラム、その他の野菜113.2グラムで(＋)5.6％、(＋)58.5％、(＋)1.1％と増加しているが、その他の果実類は(－)14.6％の減少を示している。

その他の消費者世帯

穀類の摂取量は418.8グラムで前年に比べ(－)1.9％減少している。

油脂類は6.9グラム、豆類75.4グラム、動物性食品181.0グラムで(＋)1.5％、(＋)7.6％、(＋)10.7％といずれも前年摂取量を上廻っている。

また、野菜・果実類については緑黄色野菜37.7グラム、柑橘・トマト25.9グラム、その他の野菜類

118.0グラムで前年に比べて(+)11.9%, (+)30.8% (+)4.7%と増加しているが、その他の果実類は21.8グラムで(-)43.0%と大きく減少している。

(ハ) その他の世帯

穀類の摂取量は453.2グラムでこの世帯だけが前年に比べて(+)4.1%増加している。

いも類は57.0グラム、油脂類は5.3グラムで(-)38.2%, (-)11.7%と減少している。豆類は17.7グラム、動物性食品146.7グラム、柑橘類・トマト19.1グラムで(+)0.6%, (+)9.3% (+)35.5%と前年摂取量を上廻ったが、その他果実類、緑黄色野菜、その他の野菜類はいずれも減少を示した。

3) 食品群別栄養構成

業態別に各栄養素の食品群別摂取構成を検討してみると農村生活者を中心とする生産者世帯は都市生活者を中心とする消費者世帯に比べて食品の栄養構成はかなり劣っているがこの1~2年は目立って改善されている。

第36表 熱量蛋白質脂肪の食品群別摂取比率(業態別) (単位=%)

食 品 群 別	熱 量			蛋 白 質			脂 肪		
	生産者 世帯	消費者 世帯	その他 の世帯	生産者 世帯	消費者 世帯	その他 の世帯	生産者 世帯	消費者 世帯	その他 の世帯
総 数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	1.000	100.0	1.000	100.0
穀 類	71.9	65.8	71.0	45.8	38.5	42.9	17.1	13.1	16.8
い も 類	2.5	2.0	2.3	1.6	1.1	1.4	0.0	1.0	0.8
砂 糖 類	2.5	2.4	0.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0
油 脂 類	2.5	3.4	2.2	0.0	0.0	0.0	24.9	24.9	21.0
豆 類	5.1	5.1	5.2	12.0	10.7	11.4	16.7	13.1	17.2
動 物 性 食 品	8.4	12.7	9.8	32.6	41.9	36.9	33.8	40.7	37.4
野 菜 ・ 果 実	3.2	3.5	3.1	6.1	5.1	5.3	0.1	1.6	0.8
そ の 他	3.9	5.1	6.2	1.9	3.7	2.0	7.4	5.6	6.0

熱 量

生産者世帯は穀類から71.9%, 摂取しているのに対し消費者世帯は65.8%であり、両業態とも前年の73.2%, 67.1%に比べて低くなっており、次いで動物性食品から生産者世帯8.1%に対し、消費者世帯は12.7%で上廻っている。油脂類は消費者世帯3.4%, 生産者世帯2.5%, 野菜、果実類は消費者世帯3.5%, 生産者世帯1.6%となっている。

なお、5月に実施した消費者世帯を細分した各業態の熱量の食品群別摂取率をみると次のとおりである。穀類からの摂取率の最も高い世帯は日雇、家内労働者世帯で71.1%を占めている。

次いでその他の消費者世帯が68.1%, 事業経営者世帯67.2%, 常用勤労者世帯64.5%となっている。

また、動物性食品からの摂取率は常用勤労者世帯が13.5%で最も高く、次いで事業経営者世帯12.5%, その他の消費者世帯12.1%, 日雇・家内労働者世帯10.1%となっている。

第37表 熱量の摂取比率(消費者世帯細分・37年5月) (単位=%)

業 態 別	総 数	穀 類	いも類	砂糖類	油脂類	豆 類	動物性 食 品	野菜果実	その他
事 業 経 営 者 世 帯	100.0	67.2	1.6	2.5	2.9	5.2	12.5	3.1	5.0
常 用 勤 労 者 世 帯	100.0	64.5	1.8	2.7	3.9	4.8	13.5	3.2	5.6
日 雇 ・ 家 内 労 働 者 世 帯	100.0	71.1	1.8	2.3	2.2	5.5	10.1	2.5	4.5
そ の 他 の 消 費 者 世 帯	100.0	68.1	1.7	2.7	2.7	5.2	12.1	3.3	4.2

蛋白質

蛋白質のうち動物性食品からの摂取率は消費者世帯が41.9%，次いでその他の世帯36.9%，生産者世帯32.6%でいずれも前年を上廻っている。

また、穀類からの摂取率は生産者世帯が46.0%で最も高く、その他の世帯42.9%，消費者世帯38.5%となっている。

脂 肪

脂肪の給源となる主な食品は動物性食品、油脂類、豆類、穀類等であるが、そのうち動物性食品の占める割合が最も高く消費者世帯40.7%，その他の世帯37.4%，生産者世帯33.8%となっている。

また、油脂類は生産者世帯と消費者世帯が24.9%，その他の世帯21.0%となっている。

穀類からの摂取率は生産者世帯17.1%，その他の世帯16.8%，消費者世帯13.1%でありその他の食品群については業態間に大きな差はみられない。

4) 業態別食材料費

昭和37年度の食材料費を業態別にみると消費者世帯が157,28円で最も高く、前年度に比べて(+)11.5%の増加を示している。

次いでその他の世帯が121.25円で前年度に比して(+) 10.8%増えている。

最も低いのは生産者世帯で117,37円で(+) 10.8%増となっている。

第38表

食品群別食材料費対前年比 (業態別)

(昭和37年度)

			金 額				対 前 年 比			
			全 国	生 産 者 世 帯	消 費 者 世 帯	そ の 他 世 帯	全 国	生 産 者 世 帯	消 費 者 世 帯	そ の 他 世 帯
総	額		142.85	117.37	157.28	121.25	+13.7	+10.8	+11.5	+10.8
穀	類		39.54	40.99	38.84	39.07	+2.9	+3.3	+2.9	+8.3
い	も	類	3.26	3.13	3.33	3.16	+8.7	+3.6	+13.3	-10.0
油	脂	類	2.45	1.61	2.94	1.45	+26.2	+29.8	-18.5	-2.0
豆	類		7.10	6.45	7.47	6.59	+14.3	+7.5	+16.9	+8.7
魚	介	類	18.92	14.20	21.49	16.41	+12.4	+7.6	+10.4	-0.6
肉	卵	類	24.99	13.92	31.12	17.36	+30.3	+35.5	+18.9	+1.1
野	菜	類	15.13	14.35	15.70	12.27	+8.1	+11.5	+5.3	-5.5
果	実	類	9.37	6.37	11.03	7.14	+25.8	+25.4	+17.6	+51.6
調	味	嗜好品	17.22	12.39	19.89	13.53	+20.6	+12.0	+18.0	+10.0

なお、最近5年間における食材料費の年次推移をみると第10図のとおり、各業態とも大体同じような傾向で伸びているが、都市生活者を中心とする消費者世帯と自家生産物の依存度が高い生産者世帯との間には大きな格差がみとめられる。

又、食品群別の支出構成をみると第34表のとおりで穀類を除く各品目で生産者世帯は消費者世帯をかなり下廻っており、特に動物性食品と油脂類の差が著しい。

5) 栄養欠陥による身体症候 (業態別発現状況)

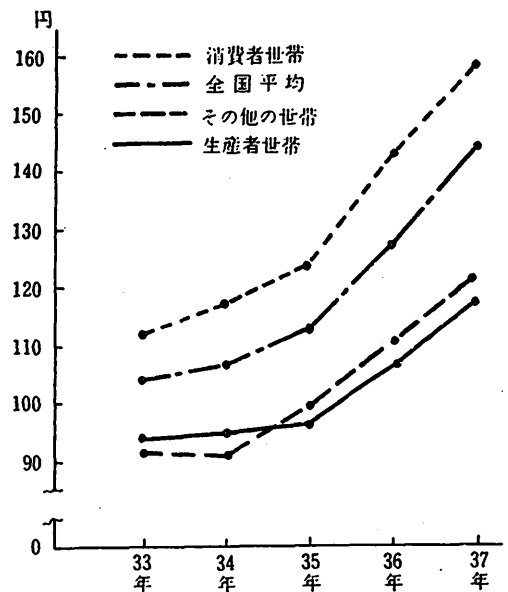
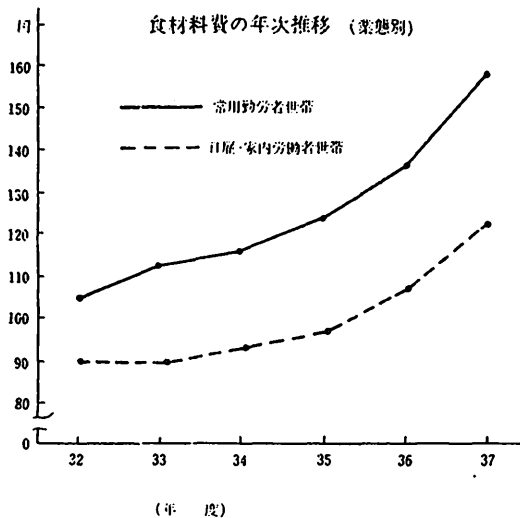
身体症候の発現状況を業態別にみると、その他の世帯が24.8%で最も高く次いで生産者世帯24.3%と高率に発現しているが、それに比べて消費者世帯はかなり低く18.3%である。

前年度に比較すると、生産者世帯、消費者世帯ともに若干減少しているが、生産者世帯はまだ身体症候

第 10 図

食材料費年次推移 (業態別)

業 態	年 度	32年	33年	34年	35年	36年	37年
常用勤労者世帯		104.71	112.68	115.50	123.44	135.63	157.95
日雇・家内労働者世帯		99.82	89.24	92.69	96.16	106.47	121.58



第39表

1人1日当り食材料費費および比率 (業態別)

		金 額			構 成 比			対 前 年 比		
		生 産 者 世 帯	消 費 者 世 帯	そ の 他 世 帯	生 産 者 世 帯	消 費 者 世 帯	そ の 他 世 帯	生 産 者 世 帯	消 費 者 世 帯	そ の 他 世 帯
総 額		117.37	157.28	121.25	100.0	100.0	100.0	+10.8	+11.5	+10.8
穀 類		40.99	38.84	39.07	34.9	24.7	32.2	+ 3.3	+ 2.9	+ 8.3
い も 類		3.13	3.33	3.16	2.7	2.1	2.6	+ 3.6	+13.3	-10.0
油 脂 類		1.61	2.94	1.45	1.4	1.9	1.2	+29.8	+18.5	- 2.0
豆 類		6.45	7.47	6.59	5.6	4.7	5.4	+ 7.5	+16.9	+ 8.7
魚 介 類		14.20	21.49	16.41	12.1	13.7	13.5	+ 7.6	+10.4	- 0.6
肉 卵 類		13.92	31.12	17.36	11.9	19.8	14.3	+35.5	+18.9	+ 1.1
野 菜 類		14.35	15.70	12.27	12.2	10.0	10.1	+11.5	+ 5.3	+ 5.5
果 実 類		6.37	11.03	71.4	5.4	7.0	5.9	+25.4	+17.6	+51.6
調味嗜好品		12.39	19.89	13.53	10.6	12.6	11.2	+12.0	+18.6	+10.0

第40表

1人1日当り食材料および比率 (消費者世帯細分 37年5月)

		金 額 円				構 成 比 %			
		事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
総 額		154.51	157.95	121.58	138.88	100.0	100.0	100.0	100.0
穀 類		37.85	36.80	39.82	36.79	24.5	23.3	32.8	26.5
い も 類		2.85	2.75	2.69	2.39	1.8	1.7	2.2	1.7
油 脂 類		2.51	3.67	1.59	2.53	1.6	2.4	1.3	1.8
豆 類		7.24	6.30	6.37	6.79	4.7	4.0	5.2	4.9
魚 介 類		22.19	20.85	15.95	20.07	14.4	13.2	13.1	14.5
肉 卵 類		28.23	32.19	17.34	24.82	18.3	20.4	14.3	17.9
野 菜 類		10.07	13.17	10.15	11.65	6.5	8.3	8.3	8.4
果 実 類		9.67	10.42	4.39	7.52	6.2	6.6	3.6	5.4

の有症率において消費者世帯を大きく上廻っている。

なお、各症候別にみるといずれの症候も生産者世帯は消費者世帯より高率であるが、特に著しい差のあるものは口角炎で消費者世帯の2.0%に比べて生産者世帯は2倍以上の5.6%となっている。

第41表 身体症候の年次推移 (消費者世帯)

	33年	34年	35年	36年	37年
有 症 率	20.9%	21.0%	18.6%	19.1%	18.3%
貧 血	2.6	2.3	2.1	2.6	1.8
口 角 炎	3.8	3.2	3.0	2.7	2.0
毛孔性角化症	3.0	2.2	2.4	3.3	3.1
けん反射消失	8.8	10.3	8.9	7.8	8.2
ひ 腹 筋 圧 痛	4.9	5.5	4.1	4.2	4.6
浮 腫	2.6	3.0	2.6	3.0	2.6

第42表 身体症候の業態別発現率

(消費者世帯細分・5月)

	事業 経営者 世 帯	常 用 勤労者 世 帯	日雇家・ 内労働者 世 帯	その他 の消費 者世帯
有 症 率	19.4%	17.2%	23.2%	22.9%
貧 血	1.5	1.7	2.4	3.7
口 角 炎	1.7	1.5	3.7	2.9
毛孔性角化症	3.4	2.9	4.9	3.7
けん反射消失	8.4	8.0	8.8	9.6
ひ 腹 筋 圧 痛	5.4	4.5	6.4	4.7
浮 腫	3.4	2.0	2.8	4.0

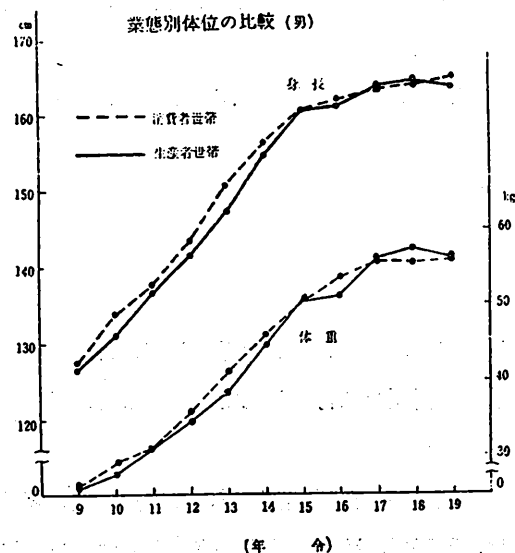
次に最近5年間の年次推移をみると第41表のとおり、貧血、口角炎等は年々減少の傾向にあり、これはこの数年における動物性食品等の摂取増加によるものと考えられるが、ビタミンB₁と関係の深いけん反射消失は生産、消費の両業態ともに前年度に比べて発現率が高くなるなど減少の気配がみられない。

次に5月調査における消費者世帯細分の結果についてみると各業態とも前年度に比べて有症率は低くなっている。

そのうち、日雇・家内労働者世帯が23.2%の有症率で最も高く、次いでその他の消費者世帯22.9%、事業経営者世帯19.4%、常用勤労者世帯は17.2%で最も低い。

なお、各症候別にみるとけん反射消失とひ腹筋圧痛が平均して8.2%、4.9%と高率であることが目立っている。

第 12 図



6) 体位 (業態別)

生産者世帯と消費者世帯の身長、体重の対前年の増減をみると殆んどどの年齢層を通じて増加がみとめられる。

なお、消費者世帯は生産者世帯に比べて第12図のとおり12~14才の年齢層では身長、体重ともに大きく上廻っているが、17~19才にかけて伸び悩みの傾向にあり、身長は大差なく、体重は却って低くなっている。

次に女子についてみると前年度に伸び悩みの状態を示した生産者世帯の女子が本年は1~2の例外を除くすべての年齢層で身長、体重ともに増加し、特に10~20才では消費者世帯の女子を上廻る増加を示し、10代の後半における身長は消費者世帯の女子と

優劣をつけ難い水準に達し、体重も10～20才では消費者世帯を上廻っている。

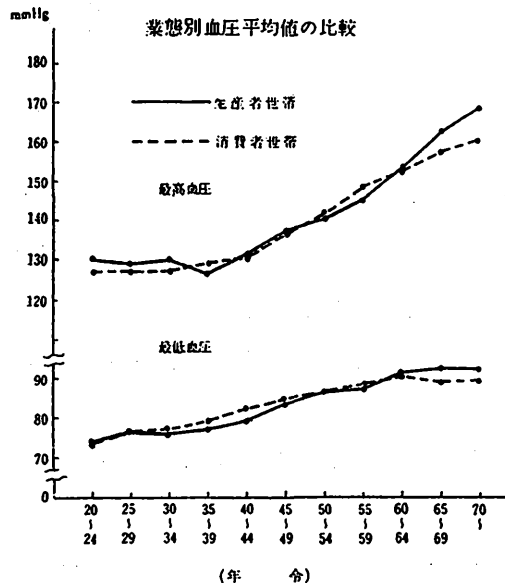
7) 血圧 (業態別)

昭和37年度の血圧平均値の成績を業態別に比較すると第13図のとおりで、業態間には特に大きな差異はみとめられない。

ただ、60～64才をこえると消費者世帯は上昇率が鈍化するのに対して生産者世帯は消費者世帯を上廻る上昇をつづけて70才以上では最高血圧168mmHg、最低血圧92mmHgに達する。

なお、性別にみても男女間で特に大きい差はみられない。

第 13 図



第43表-1 う歯の業態別発現率

	男	女
生産者世帯 { 有 症 率	74.1%	77.4%
{ 1人当り本数	5	6
消費者世帯 { 有 症 率	76.2	80.1
{ 1人当り本数	5	6
その他の世帯 { 有 症 率	71.3	77.7
{ 1人当り本数	5	6

第43表-2 欠損歯の業態別発現率

	男	女
生産者世帯 { 有 症 率	36.4%	44.3%
{ 1人当り本数	9	11
消費者世帯 { 有 症 率	36.7	43.5
{ 1人当り本数	7	9
その他の世帯 { 有 症 率	36.5	43.6
{ 1人当り本数	12	12

8) 歯牙異常 (業態別発現率)

歯牙異常を各業態にわけて観察してみると、う歯の有症率の平均値では消費者世帯の男子が76.2%で最も高く、次いで生産者世帯は74.1%、その他の世帯71.3%となっている。

女子は消費者世帯が80.1%で最も高く次いでその他の世帯77.7%、生産者世帯77.4%であり、消費者世帯は男女ともに最も高い有症率を示している。

C 国際比較からみたわが国の栄養水準

1) 国際比較からみた栄養状態

次に国民の栄養状態は諸外国と比較した場合にいかなる地位におかれているかを考察してみよう。

ただ、わが国が実施している国民栄養調査の如き消費統計は諸外国では行なわれていないので、外国のものはすべて食糧バランスシートから算出したものである。

この食糧バランスシートとは、ある一定の期間内における食糧の各種目別の生産量、輸出量、在庫変動等により食糧の総供給量を推計し、これから飼料用、工業用、種子用、減もう量等を差し引いて、その年次に食糧として消費する純食糧の量を推計し、更に各食糧のもつ栄養量から国民1人1日当りの摂取量